



Title	日本語の「総主文」
Author(s)	森塚, 文雄
Citation	大阪外大英米研究, 9, p. 163-178
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99017">https://hdl.handle.net/11094/99017</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 日本語の「総主文」

森 塚 文 雄

## 1. 「深層構造」と「生成意味論」

Noam Chomsky を開祖とする変形生成文法家たちの文法理論は、自然語の現実に発話される文の表面形式に現われていない、いわば文の内面的構造を巧みに捉えてこれを簡明かつ統一原理のもとに体系だてて Syntax プロパーの守備範囲<sup>1)</sup>を言語の深部にまで拡大するという従来の文法学者らが散発的に捕捉しながらも遂に果たし得なかった夢を見事に実現してのけたものと言えよう。

Chomskyの既に入口に膾炙した。

- (1) John is eager to please.
- (2) John is easy to please.
- (3) John is certain to leave.

のような文には、表面上、音声上の類似にもかかわらず、それぞれ異なった「意味」のあることは、専門の文法学者たらずとも、英語を母国語とする人々ならば誰れ人も直観的にうなずける筈であるが、ただ、違うという「勘」だけでは駄目であって、この外形・意味間の齟齬（そご）は各文の表面構造の背後に抽象的な深層構造を設定し種々の変形操作によって解決するという代数学的手法にも似た手順を用いた天才Chomskyの、この大胆な試みは、未だ発展途上であって多分に流動的な性格のものであるにもかかわらず、広く世界の言語学界の注目を浴びるに至ったことは衆知の事実である。

わが国でも言語学（とくに英語学）、英文法をその専門の研究分野とする諸家はもとより、近年若手の国語学者らもChomsky一派の文法理論と真剣に取り組み、これを日本語文法に適用して新しい変形生成文法の体系を樹立しようと努力しておられるのは誠によろこばしいことである。Chomskyらの変形生成文法家たちはその究極の目標として、いわゆる普遍文法学をうち立てようとして

いるものと想像されるので、日本語のような非印欧語の新しい言語学、文法学を日本語を母国語とするわれわれがあみ出して言語研究の国際化の一翼を担うことには、それなりに大きな意義のあるものと確信される。

しかしながら、数多くの利点をもって従来の構造主義その他の文法理論の行き詰りを打開するものとされている Chomsky らの変形生成文法理論にも、それが現在尚お発展途上にあるだけに、細部にわたっては問題がないわけではない。衆知の通り Chomsky らの変形生成文法理論では、記述の対象が直接には「文」という特定の言語形式を基本的な最大の単位として採り、理論全体が「文」の生成規則という記述的手段の上に立っている。こうして Chomsky はその標準理論では一応統語・意味・音韻の三部門を立ててはいるが、音声面と意味面との両端の中間に位してこれらを結びつける深層構造の存在意義を重視する余り意味論には解釈機能という従属的地位を与えて意味解釈のみを行なわせているが、深層構造の分析が進むに従って深層構造と意味構造が漸次接近して統語論と意味論との区別がさだかでなくなれば、Chomsky らの意味解釈の部門が不用品になりはしないかという疑問が当然生じてくる。この疑問が、Chomsky 理論を出発点としながらも尚お（部分的に）あき足らない学者らの一層深い深層構造探求の意欲をかき立て、種々の手直し論が矢継ぎ早々に現われている模様であるが、Charles J. Fillmore の「格文法」(Case Grammar)、John M. Anderson の「格の文法」(Grammar of Case) や George Lakoff, James D. McCawley, John R. Ross らの生成意味論者の所説がその雄たるものであろう。

Fillmore らの格文法の「格」(Case) の概念は、もとより従来の文法理論で用いられた格（変形文法家たちの「表層の格」）とは全く性質の異なるものであって、伝統的な格（彼はこれを「格形式」(Case form) と呼んでいる）の背後にある統語論的、意味論的關係とみられている。「格形式」が表層構造に属して各個別言語ごとに異なった形態をとるのに対して、「格」は深層構造の問題であってあらゆる言語に共通する普遍的な性格をもつものとされている。

つまり Fillmore の「格」は内在的、普遍的な概念であって、彼の格理論には言語の普遍性を目指すところが強く感じられるが、この点では Chomsky らの変形生成文法家と揆を一にすると見えよう。Fillmore は、言語の他の 2 部門たる音韻と文法の研究に比べていちじるしく立ちおくれている意味の科学的研究に新しい一歩をふみ出したものとして注目される。Chomsky の標準理論では文 (S) が主部の名詞句と述部の動詞句から成り立っているが、Fillmore の句構造規則では文全体を修飾する法範ちゅう (Modality) と文の中核となる命題範ちゅう (Proposition) から成り立つとし、後者を動詞、形容詞を含む動詞類 (V) を中心として一個ないしそれ以上の格範ちゅう (C) から成るものとしている。また標準理論では 2 つの完全に別個の派生が与えられる同一動詞の自動詞構文と他動詞構文を、単一または極めて類似の深層構造から派生するものとして両構文の親近性を形式的に説明できるとしているなど、いろいろ興味深い利点をもっている。そのほか前掲の Anderson や Lakoff, Mc Cawley, Ross らも、それぞれに基だ示唆に富む提案を行っており、深層構造は一そうその深度を増し抽象度を加え、意味の科学的研究は限りない発展を遂げるであろう。

本稿では、多くの国語学者らの好個の研究対象としばしば議論されている、いわゆる「総主文」のある種の型について (怪しい直観力ながら) 些かの意味論上の私見をさしはさんでみたい。

## 2. 日本語の助詞「は」について

戦前、筆者と親しくつきあっていただ大変日本語の達者な米人がいて、筆者との間に、しばしば日英語のチャンポンで議論をたたかわせたことがある。話題は日英両語の表現の比較ということが多く、お互いに相手の言語のむつかしさに対する愚痴もとびだしたこともあったが、筆者の英語の冠詞、前置詞の使いわけのわずらわしさに対する抗議の彼からの応酬は、日本語の面倒な敬語法と助詞「は」「が」の使いわけであったと記憶する。当時筆者には、母国語であ

る組し易さからか、「は」「が」の用法上の複雑怪奇さが左程のものとは思えなかったので、矢張り外人だなあ、と軽い軽べつの念さえ抱いていた。ところが3年前ウィスコンシン州の某大学に交換教授として招へいされ担当科目の一つとして日本語をもたされる破目に陥ってみて、「は」「が」の使いわけのむつかしさに面喰ってしまい、誠に恥ずかしいことながら30数年たって漸く、かつての米人の慧眼に驚いたものである。

さて、この日本語の助詞「は」は当然のことながら日本の国語学者の間で相当に論議的となっているらしく、これを扱った文献も少なくない。春日政治博士の「初出」の場合の「が」に対する（聞き手の側の）「既知のものに用いる「は」」、松下大三郎博士の「題目語としての、既定、不可変、不自由な」指定を表わす「は」、松村明教授の「既知の概念」という説明での主格における「は」など、「は」の研究はきわめて多彩である。三上章氏は、その著「象ハ鼻ガ長イ」のはしがきて、

日本語の文法的手段のうち、最も重要なのはテニヲハです。中でもハです。本書は、問題をそのハ一つに絞って、日本文法の土台を明らかにしようとしたものです。代行というのが中心概念の一つになっています。ハはガノニヲを代行する、というのです。

と述べられ、更に本文中で

係助詞「ハ」は係助詞の名にそむかず、大きくはたらいて文末に達しますが、格助詞「ガ」「ヲ」「ニ」などは、顕在のもの潜在のもの、動詞や形容詞の語幹まで係って役目が解消し、それ以上文末に達する余力を持ちません。……ガノニヲの係りは小さい代わりに実質的です。むしろ、実質的だから小さいのでしょう。「ハ」の係りが大きくて虚勢的なもの、そうあるべきことでしょう。……係助詞「ハ」（それから「モ」）と格助詞が、ヲ、ニ、ト、カラとの違いは、次のように対照的です。

係助詞 心理的（虚） 大きく係る

格助詞 論理的（実） 小さく係る

「Xへ」は、すでに何度も言ったように、「Xニツイテ言エバ」というほどの切り出しであって、「X」を題目として提示しているのです。それで、そのあと「X」についてある koto を述べるわけですが、述べたい koto は一文で終わるとは限りません。……前文の提題「Xへ」にピリオドを越える底力が認められるのです……ただの「Xへ」においてだけ、本務と兼務とが並び行なわれます。本務は題述の呼応です。……兼務は「ガ」「ノ」「ニ」「ヲ」の代行ですから、ガノニヲ相応の係り方しかするはずがないのです。文末までの本務と途中までの兼務との二重性を理解することが、日本語の構文論への開眼です。（下線筆者）

すなわち、係助詞「は」には題述（～について言えば）の呼応という本務と、格助詞「が」「の」「に」「を」の代行という兼務とがあってこれが日本語の一大特色である旨強調されておられる。

3)  
藤村靖氏は、深層構造の句構造木の形で形式要素間の関係として捉えられる意義以外の意義的要素の付着を、文の表面的な形式の変更の形で文の外形に強いるものであって、形式的には非常に広い意味での強調に類する現象が、はっきりと言語形式として認められる文法的単位としての "Attachment Transformation"<sup>4)</sup> を立てた黒田成章氏の所説を引用され、このもっとも典型的な例として日本語の助詞「は」をあげておられる。氏は、「は」という係助詞には、Chomsky の "Presupposition"（前提）という場面的要素を指示する役割があって、とくにそれがつく名詞句が文頭におかれて提題としての性格を持つとこの意義的性格が明らかに意義される、と述べ、この「は」として現れる要素が、文のいろいろな位置（深層構造）にある構成単位にほとんど自由に結合し得る故に、特定の構文的環境での辞書項目の選択とは全く異なるものであると同時に、また構文的位置に結びついた意義価をもつ格助詞などの文法的形式とも全く異なるものである、と述べておられる。

最後に、尾上圭介氏は、「「は」という助詞はそもそも、一つの文を大きく二つの部分に分けるという働きを持つ。「XはY」と言えば、何であれ一つの

意味内容をXという部分とYという部分とに分けて、その二者の結合として一文を示すことになる。これを裏から言えば、「は」の前にあるXと後にあるYとは、まさに「は」の前後にあるというそのことによって、結びつけられ、一つの意味内容を構成することになる。時間の流れに即してより正確に言えば、XにYが結びつけられるのである。これを、題目とそれに結びつけられるべき解説というように言っても大過ない。X、Yは、名詞であろうと、用言、句であろうと、何であれ「XはY」という形で出てくれば、結びついて一つの意味を構成すべき二者として聞手に理解されるのである。……「XはY」という形式は、言おうとする内容からXとYとの、いわば二つの点だけを取り出し、全体をただその二者の結合としてのみ表現する形である。二点XとYとがいかなる意味関係において結びつけられるか、その結果XとYとを含んで成立する全体の意味の構造はどのようなものであるか、それはすべて聞き手にゆだねられる。……」(下線筆者)と説いておられる。

叙上の学者は、おのおの豊富な例文をそえて自説の説得に努めておられるが、これらの説をみても助詞「は」の(とくに内面的)機能はきわめて複雑なものであることがうかがわれる。

### 3. いわゆる「総主文」構造の意味

そこで、日本語の助詞「は」に関する諸学者の諸説を参考にして、「XはYが～」という総主文構造についてその各種の意味分析を試みてみよう。

(1) 今年の早慶戦は慶応が勝った／夏は日が短く夜が長い／日本は温泉が多い／京都は秋がよい／牡蛎(かき)は広島が本場だ

(2) 弟は野球が好きだ／彼は英語が話せる(書ける、できる)／その政治家は人望がある(ない)

(3) 責任は私が負う／勘定は僕が払うよ／両親の面倒は私たちが見ましょう。

(4) 象は鼻が長い／あの娘は襟足がきれいだ／その生徒は顔色が悪い(冴えない)。

(6) あの高僧は慈悲深(ぶか)い／今の生活は気楽です／王子ハムレットは気高(けだか)い。

今仮りに、この構造の後半つまり「NP<sub>2</sub> が + VP」をまとめて複合述部と称してみると、(1)群から(6)群へと次第に複合述部の独立性が弱まり逆にこの複合述部を構成する（NP<sub>2</sub> が）、（VP）の2個の要素の意味的結合が強まってくるのが分かるであろう。すなわち、(1)群では総主文構造の前半つまり「NP<sub>1</sub> は、は伝統文法家のいう Modifier に近く従って後半の複合述部は実は独立の文に近いが、(5)(6)群に至ってはこれと全く反対に「NP<sub>2</sub> が + VP」は、その構成要素間の融合が完成に近づき（従って各要素の原義が多分に失われて比喩的な新しい意味を生じ、とくに最後の(6)群では「が」が消失して顕著な音韻変化がみられ）遂には単一の形容詞（形容動詞、動詞）に相当するものとみなすことができよう。

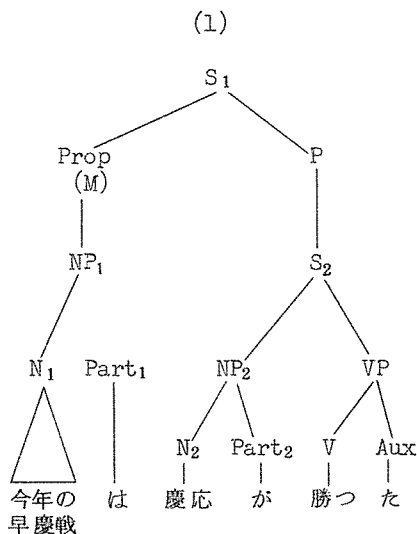
-169-



次に(4)群が、いわゆる「総主文」という名称に最もふさわしいタイプで「NP<sub>2</sub>が」という「小主語」が後続のVP と結合して "Minor Sentence" を構成し、この Minor Sentence が「NP<sub>1</sub> は」という「大主語」の(複合)述部となって "Major Sentence" を作り上げるという二段構えの、日本語に特有の文構造をしているとみられる。

以上の解釈にのっとって代表的なタイプの総主文の枝分れ図を考えてみよう。

先ず構造全体を Fillmore 流に、問題の係助詞「は」と先行の NP<sub>1</sub> との結合に一種の法範疇(ここでは仮りに「提題格」(Propositive)と呼んでおく)と NP<sub>2</sub> + 格助詞「が」+ VP (→ A, Av, V) の結合たる命題範ちゅう(Proposition)に分枝してみる。(Part = <助詞>)



表層構造 =

「今年の早慶戦は慶応が勝った」

$S \rightarrow \text{Prop(ositionive)} + \text{P(roposition)}$

$\text{Prop} \rightarrow \text{NP}_1$

$\text{P} \rightarrow \text{S}_2$

$\text{NP}_1 \rightarrow \text{N} + \text{Part(icle)}$

$\text{S}_2 \rightarrow \text{NP} + \text{VP}$

$\text{VP} \rightarrow \begin{cases} \text{A} \\ \text{Av (形容動詞)} \\ \text{V} \end{cases}$

$\text{N}_1 \rightarrow \text{今年の早慶戦}$

$\text{Part} \rightarrow \text{は}$

$\text{NP}_2 \rightarrow \text{N} + \text{Part}_2$

$\text{VP} \rightarrow \text{V} + \text{Aux}$

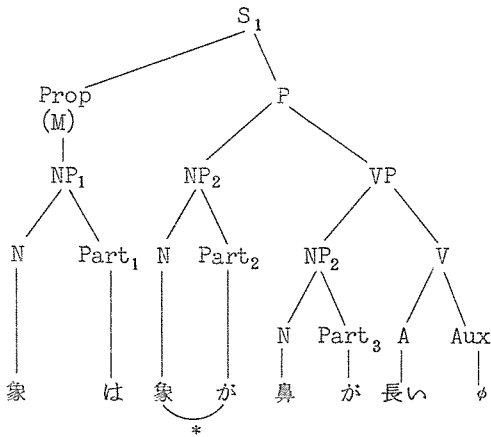
$\text{N}_2 \rightarrow \text{慶応}$

$\text{Part}_2 \rightarrow \text{が}$

$\text{V} \rightarrow \text{勝つ}$

$\text{Aux} \rightarrow \text{た}$

(4)



表層構造 =

「象は鼻が長い」

$S_1 \rightarrow \text{Prop} + P$

$\text{Prop} \rightarrow \text{NP}_1$

$P \rightarrow \text{NP}_1 + \text{VP}$

$\text{NP}_1 \rightarrow \text{N} + \text{Part}_1$

$\text{NP}_1 \rightarrow \text{N} + \text{Part}_2$

$\text{VP} \rightarrow \text{NP}_2 + V$

$\text{N} \rightarrow \text{象}$

$\text{Part}_1 \rightarrow \text{は}$

$\text{N} \rightarrow \text{象}$

$\text{Part}_2 \rightarrow \text{が}$

$\text{NP}_2 \rightarrow \text{N} + \text{Part}_3$

$V \rightarrow \text{A} + \text{Aux}$

$\text{N} \rightarrow \text{鼻}$

$\text{Part}_3 \rightarrow \text{が}$

$\text{A} \rightarrow \text{長い}$

$\text{Aux} \rightarrow \phi$

表層構造

= 「Aさんは鼻が高い」

$S_1 \rightarrow \text{Prop} + P$

$\text{Prop} \rightarrow \text{NP}_1$

$P \rightarrow \text{NP}_1 + \text{VP}$

$\text{NP}_1 \rightarrow \text{N} + \text{Part}_1$

$\text{NP}_1 \rightarrow \text{N} + \text{Part}_2$

$\text{VP} \rightarrow \text{A}$

$\text{N} \rightarrow \text{Aさん}$

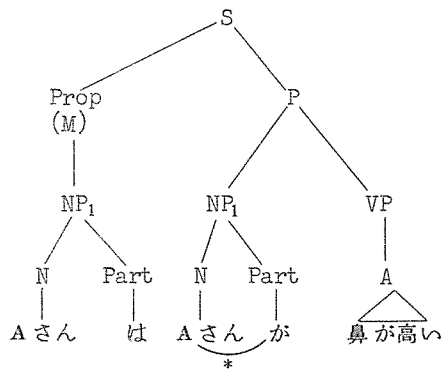
$\text{Part}_1 \rightarrow \text{は}$

$\text{N} \rightarrow \text{Aさん}$

$\text{Part}_2 \rightarrow \text{が}$

$\text{A} \rightarrow \text{鼻が高い}$

(5)



\* 表層では「同一名詞句消去規則」によって除去する。

以下、二、三の点で、上述の各群の内面構造の相違に対する傍証をかためてみよう。

(1) 構造の後半( $NP_2$  が + VP( $\rightarrow A, Av, V$ )) が命題として独立性をもっているか単一の VP( $\rightarrow A, Av, V$ ) に準ずる単純概念であるかの区別を、純粹に "degree" を表わす副詞「非常に、とても(口語のみ)」の自然な挿入位置によって判断できる。すなわち(1)群では

- { 京都は秋がとてもよい(○)  
京都はとても秋がよい(稀)

(5)群では

- { Aさんはとても鼻が高い(○)  
Aさんは鼻がとても高い(比喩的意味 (= be proud ) では不可能)

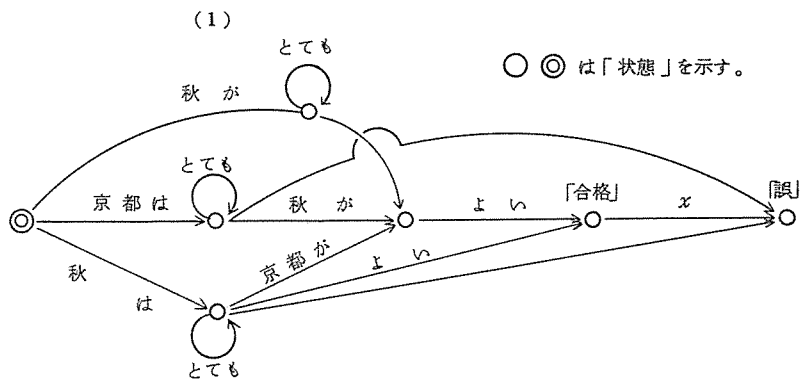
(尚お「天狗は鼻がとても高い」など字義の意味では可能で、これは勿論(4)に属する)

(2) ( $NP_2$  が + VP( $\rightarrow A, Av, V$ )) の本来の2個の構成要素が(1)ではそれぞれ独立しているので  $NP_2$  と  $NP_1$  との文中での位置変換は可能であるが、(5)ではこれら2要素の融合度が強い<sup>7)</sup>ため位置変換は不可能か困難である。(4)はほぼそれらの中間にある。

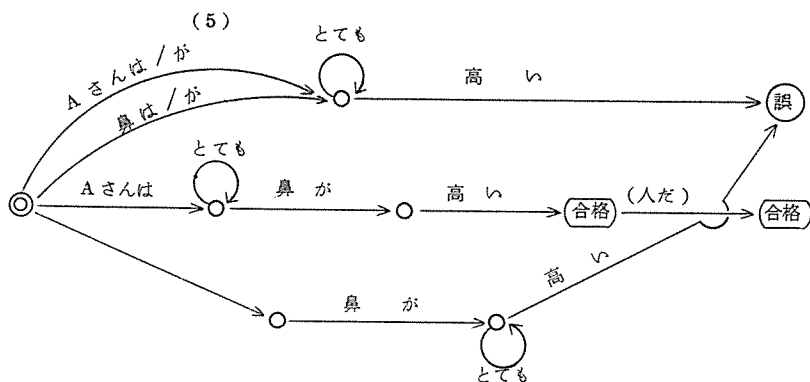
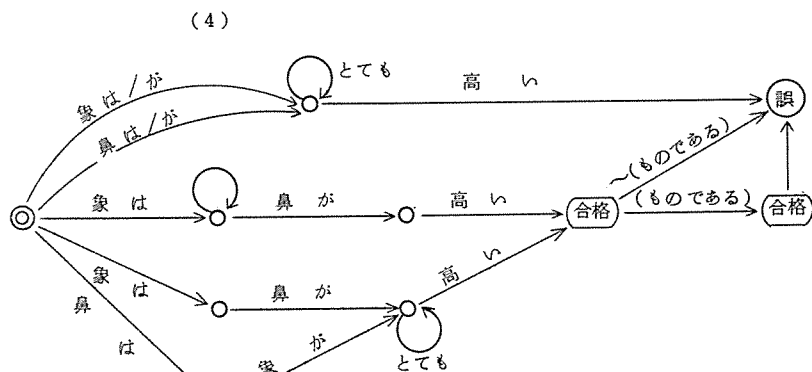
- (1) { 京都は秋がよい(○)  
秋は京都がよい(○)  
象は鼻が高い(○)  
(4) { 鼻は象が高い(○)(但し強調)  
Aさんは鼻が高い(○)  
(5) { 鼻はAさんが高い(×)

(但し「高い」が原義に用いられ、文意が強調されるときは可能である。(4)群もほぼ同じ。)

叙上の相違を「機械モデル」<sup>7)</sup>で図示してみよう。



(xには、例えば「ところです」「ころだ」などの表現がきたときのみ「合格」<sup>6)</sup>)



(3) 同一の「NP<sub>1</sub> は」の次に(5)群では「NP<sub>2</sub> が」と並列的に一般の VP（主に A, Av）が一個ないし二個以上自由に用いられ得るが、(1)群ではこれが無理である。<sup>8)</sup>

（例）

桃太郎は勇ましく（て）気がやさしく、力が／もある。（○）

象は大きく（て）鼻が長い（やや不自然）

象は鼻が長く（て）大きい（「大きい」主体は象ではなくてむしろ鼻である、と解釈され、文全体は(1)群に近づく）

牡蠣はやわらかく（て）冬がいい（不自然）

ここで日本語の総主文のうち代表的な(4)群を中心とする深層構造に関して、三上章氏は大へん示唆に富んだ発言をしておられるので、再び引用させていただく。

たとえば、

甲ニハ、乙が答エヲ教エテヤリマシタ。

というセリフを耳にした場合、そのセリフどおりに暗記するのならともかく、意味を記憶するには、おそらく「乙が甲ニ答エヲ教エタ」に近い形のものにしてしまうでしょう。

象ハ、鼻ガ長イナア！

象ノ鼻ハ、長イナア！

前文は、「象について、ソノ鼻が長イ no にあきれた表現ですし、後文は、「象ノ鼻」について、ソレガ長イ no にあきれた表現です。前文では視線が象全体に向けられているのに、後文では鼻に焦点が絞られる、というような表現の違いはありますが、どちらを聞いたにしても、あとで思い出す場合には、なんでもあいづは、象ノ鼻ガ長イ no にあきれていたっけというふうになりそうです。とすれば、これは文が無題化しているのです。

ワタシハ、彼女ノ婚礼ノナコウドヲシタ。

彼女ノ婚礼ノナコウドハ、ワタシガシタ。

彼女ノ婚礼ハ、ワタンガナコウドラシタ。

この3セリフのどれを聞いたにしても、少し時がたてば、どこに「ハ」が使っていたかというようなこまかいニュアンスは忘れてしまいますから、やはり彼は、自分が彼女ノ婚礼ノナコウドラシタも言っていたな、くらいなところに落ちつくでしょう。

このように、われわれの記憶表象は概して無題化されて、Koto の形に近く  
なっているように考えられます。無題化しているほうが記憶の負担が軽いのです。

英語にしろ日本語にしろ、現実の多種多様な発話には、話者が聴者に伝えようと意図する基本的な情報内容に加えて、その場その場の場面に則した、いわば種々の肉づけが行なわれる結果、同一の情報内容——論理的ミニマム——が現実には文脈的・場面的な衣をまといいろいろ異なった表面的発話となる。三上氏がここでいみじくも「無題化された記憶表象」こそ Chomsky の「深層構造」の内容をなすものではないか、と考えられる。

とまれ日本語の表層文として極めて多用される「総主文」構造についての筆者の考えは

(1) 文主(主に有情の人間)の恒久的属性を表わすいろいろの抽象名詞が、「良い」「悪い」「ある」「ない」「高い」「低い」「重い」「軽い」「深い」「浅い」など少数の基本的形容詞(「ある」は活用上、動詞)と「が」を介してかなり自由に結合されて、丁度英語の Verb-Adverb Combination のように莫大な(一種の)複合形容詞を作り出して、これらが複合述部となって提題助詞「は」を伴う真主語と共に、きわめて多種多様の文を生み出して我が日本語の表現の豊富化をたすけ、絶対数の乏しい形容詞の欠を補って余りあること、

(2) (とくに1、2人称の)「主語」は英語の如くに一つ一つ表出されずに省かれるという日本語の癖が、係助詞「は」の“ピリオド”、(往々にして複数)を超えての長大な射程の故に「NP + は」につづく代表文に後続するいくつも

の「無主語文」と相まって、この総主文の後半のみからなる形成上「NP + が ~」が何の抵抗もなくわれわれ日本語諸者に受け入れられる素地をもっていること、

(3) これら「総主文」の深層構造は「名 + が + 形容詞（形容動詞、動詞）」となるのではないかと考えられること、そして最後に

(4) 「鼻が高い」「手が長い」「尻が重い（軽い）」など、形成上の 'Minor Subject'（ $N_2$  + が）が普通の性質形容詞に先行してこれと融合して単一の比喩的意味の新しい形容詞を作る場合が多いが、「程度」を表わす副詞が（ $N_2$  + が）に先行するか後行するかによって、もとの性質形容詞の意味が転義から原義へと変わり、従ってS全体の構造も異なってくること、の4点に示はれる。

〔註〕

1) たとえば、Jespersen (MEG, III; *Essentials; Philosophy*) は 'the doctor's arrival' は 'the doctor's house' とは形態上全く同一でありながら、前者をNexus-substantive と名付けて後者と区別しているのは、両者の表面上の同一性の背後に内部言語上の相違を認めていたことがうかがわれる。Jespersenのこの立場は当然構造主義主語学者の批判の対象となったが、Chomskyらの 'Surface-Deep' Contrast に大きな暗示となったであろうことは容易に察せられる。

2) 松村 明「主格表現における助詞「が」と「は」の問題」、黒田成幸 (Kuroda, S. : "Generative Grammatical Studies in the Japanese Language," Ph. D. Dissertation, MIT, 久野 暉「日本文法ノート」(「言語の科学」)、三上 章「現代語法序説」など。

3) 藤村 靖「意味と文法」(「国語学」92)

4) Kuroda, Y. : "Attachment Transformations," *Modern Studies in English*.

5) 尾上圭介「省略表現の理解」

6) この型の構文に関して小山敦子氏(「の」「が」「は」の使い分けについて)は、オリジナルとしてたとえば、「コロは耳が白い」の背後に、実質的に主語と一致し容易に推定可能で省略された「モノ」+ Copula を想定した「コロは耳<sup>の</sup>が 白い(モノノ犬デアル)」を仮説として立てておられるが、現代日本語の口語表現を共時的に観て、ここではこの仮説を必要としない立場をとる。

7) 後藤英一「オートマトンに関するバズル」(「情報科学への道」)

8) これらの単一および複合形容詞が attributively に用いられた場合には、「が」に代って属格助詞「の」が用いられるが、最近の若い世代の間では「が」がしばしば用いられる。

「顔色の蒼白い、背の高い、瘦ぎすな三十前後と云ふ年輩であるが……」  
(小杉天外「はつ姿」)ノ肉づきのいい一寸愛嬌のある顔をしてゐた。」(武者小路実篤「お目出たき人」)

#### 主な参考文献

- Anderson, J.M. : *The Grammar of Case*  
Chafe, W.L. : *Meaning and the Structure of Language*  
Cherry, C. : *On Human Communication*  
Chomsky, N. : *Syntactic Structures*  
                  : *Aspects of the Theory of Syntax*  
Fillmore, C. : "The Case for Case"  
Lakeoff, G. : *Irregularity in Syntax*  
Langendoen, D. T. : *Essentials of English Grammar*  
                  : *The Study of Syntax*  
Less, R. : *The Grammar of English Nominalization*  
McCawley, J.D. : *Grammar and Meaning*



青木晴夫「ラムとチェイフのモデル」

「『意味』と言語の構造——文章論への動き」

原田信一「構文と意味」

「構文のレベルと意味のタイプ」

林 四郎「表現行動のモデル」

藤村 靖「意味と文法」

小山敦子「『の』『が』『は』の使い分けについて

——辰成文法理論の日本語への適用——」

牧野成一「生成意味論について」

三上 章「象へ鼻カ長イ」

「現代語法序説」

中右右実「日本語における名詞修飾構造」

野崎昭弘「構文解析のための数学的モデル」

岡田伸夫「チョムスキーの言語理論」

尾上圭介「省略表現の理解」